

「連帯」と「学び合い」の経済学をめざして
－現代経済学批判ノート－

2012年1月

佐々木 建

目次

まえがき	・・・	1
「連帯」の経済をめざして		
ーグローバル資本主義に抗してー	・・・	3
I 暴走する制御不能のモンスター		3
II 「連帯」の経済をめざして		7
III 「労働」と「市場」をとらえ直す		11
IV 経済の国民的特性を再構築する		15
V 類的能力の復活をめざして		18
「学び合い」と「連帯」の経済学をめざして	・・・	19
櫻井秀子著『イスラーム金融』を手にして考えたこと		
ーイスラーム研究者との協同を模索してー	・・・	30

グローバリゼーションの時代に経済学に求められているものは何か。

危機の深刻さがさまざまな分野で論議されてはいるが、その解決策となると明確な答えはどこにも示されていない。答えはおろか、危機の全体像すら示されていないように思われる。

グローバル資本主義の最大の特徴である投機による利得を例にとってみよう。この投機の構造を破碎しない限り「格差社会」などなくなりはない。アメリカやヨーロッパの若者たちが果敢に戦いを挑んではいるが、残念ながら富裕層が投機のために所有する莫大な資金を収奪することなどおよそ不可能であろう。投機の抑制のために、またぞろトービン税導入が議論されはじめている。しかしこの施策とて増収を増やすために有効ではあっても、過剰資金を回収する手段とは到底なり得ない。批判を回避するために政治家たちが仕掛けた目くらましでしかない。トービン税はグローバルな規模で一斉に採用されない限り、資本の逃避を生み出すだけだ。しかも今の力関係では、アメリカ、イギリス、スイス等の金融的利得の巨大な国々がこの地球大的合意に参加するはずがない。それが実現出来るくらいなら、温室効果ガス削減の国際合意などとつづくに実現出来ているはず

ではないか。

既存の理論的枠組み，既存の理念にしがみついているのは，もはや展望はない。新たな理念的，理論的転換が求められているのではないか。しかも転換が求められているのは，経済学をはじめとする社会科学だけではない。その基礎にある人間観についても転機にある。お互いが生存のために，人間とは生死を賭けて闘い合うものであるとする人間観はこの際捨て去らなければならない。この小さな地球の上で今のように個人から民族，国家に至るまで激しく争い，殺し合う事態をやめない限り，人類に未来はない。「ともに豊かになる経済」を構築するための理論と施策こそが追求されなければならない。これが私のこれからの仕事のライトモチーフである。

このノートは，その問題意識の書きはじめである。次の三つの仕事，1)片岡幸彦・幸泉哲紀・安藤次男編『グローバル世紀への挑戦—文明再生への智慧—』（文理閣，2010年4月）に寄稿した論文草稿，2)2005年に本研究所ウェブサイト公表したノート，3)地域文化学会機関誌『地域研究』第11号（2008年12月）に寄稿した書評から構成されている。1)の仕事は2)3)を基礎に仕上げられてたもので，かなりの重複がある。私の思索の過程を残す意味であえて再録した。

「連帯」の経済をめざして

—グローバル資本主義に抗して—

I 暴走する制御不能のモンスター

グローバル資本主義という奇怪なモンスターが暴走している。2008 年秋のリーマン・ショックに始まった世界恐慌を目の当たりにして、先進諸国はこの暴走を制御できずに大混乱に陥っている。そのためか、「100 年に一度」「未曾有の」等、情緒的な表現がメディア上に踊る。制御に手こずっていることを自ら認めているようなものではないか。しかし人類が体験しているのは、過去に例のない特徴と規模の新たな地球大的危機であり、社会主義の失敗に力を得て市場原理主義に依拠して地球規模に拡大したグローバル資本主義の危機であることに思い至るべきであろう。

資本主義的市場経済は地球規模に拡大し、人類が育んできた多様な経済制度と生活原理がグローバル資本主義の大波に巻き込まれている。その大波が人類に平等な豊かさと安定をもたら

すものではないことを理解することはそれほど難しいことではない。社会主義の影響の下でともかくも維持されてきた国家を媒介にした所得再分配の制度を破壊し、無制約にも等しい競争に世界中の市民を投げ出し、とたんの苦しみを味あわせているからだ。それに加えて投機性の極限までの発展が重くのしかかる。労働の成果を掠め取り、なけなしの蓄えを収奪する仕組みが出来上がっている。

危機の引き金をひいたのもその極限にまで成長した投機の瓦解であった。投機によるバブルが過剰な投資を呼び、新興国との競争の激化によって顕在化するはずの設備過剰は金融資産の見せかけの拡大によって隠蔽され、自覚されることなく拡大した。見せかけの拡大を豊かさとして錯覚したのである。まったく新しい形の深刻な信用・金融恐慌が突発的に発生したのである。

この危機は新しい金融商品創造技術が作り出したものだと主張される。しかしよく考えてみよう。資本主義そのものが投機的な経済である。資本蓄積には一定の貨幣の集積が前提になる。お金を動かさなければ企業も工場も作れない。そのために信用制度と証券市場が資本主義の発展と共に、あるいはその前提として誕生したのである。株式会社の普及はこの市場の独自性を高めた。証券市場は独占資本主義の時代に入ると、独占利潤の増大にともなう投資資金の増大によってその規模を拡大していったのである。

グローバル資本主義の投機性は、資本主義本来の投機性も共有しながら、大きく違う点がある。第1に、世界中から過剰資

金が集められ、投機が地球大的に制度化されている。中国がため込んだ外貨準備も、アラブ産油国のオイルマネーもつぎ込まれ、小国の家庭の主婦たちのへそくりさえもが投入される。第2に、投機はあらゆる部門を捉え、金、石油、非鉄金属等の原材料市場、農産物先物市場、不動産市場も投機の舞台である。投機資金はより高い利得を求めて自由に動き回る仕組みが出来上がっている。第3に、投機は小国をも巻き込み、危機を深刻なものにしている。

あらゆる分野、あらゆる国が世界的規模で投機に深く取り込まれた寄生的な制度が誕生し、その危機を今体験しているのだ。かつて J・A・ホブソン、R・ヒルファードイング、レーニンらが論じた金融的利得によって独占利潤を獲得する金融資本の蓄積様式は全地球を覆う制度として君臨するにいたった。この巨大な寄生的な構造に対抗する道はあるのだろうか。このシステムの厄介なところは、既存の信用制度が投機の主体として登場したことだ。そのため投機の破綻は信用全体の収縮をもたらし、恐慌を深刻なものにしている。規制は本来の信用制度を収縮させ、資本蓄積を萎縮させかねない。過剰資金の投機的運用の監視と規制を目論む G20 が統一して施策を実施し、成功する見通しは容易なものではないだろう。

この危機によってグローバル資本主義の矛盾の深刻さが露呈されているが、その核にあるのが中国である。中国が「社会主義」を標榜する特異な資本主義、帝国主義への道に踏み出し、その過程が速まったことは、資本主義世界にさまざまな影響を

及ぼしている。勢力範囲、資源独占、資金循環だけでなく、人権抑圧の傾向を広め、グローバルな低賃金への流れを速めている。自らの内部の民族的権利を蹂躪する国が対等な共存を目指す世界的制度の実現を目指す筈がない。この奇怪な中国資本主義への依存が広まり、今ではその外貨準備と広大な市場にアメリカさえもひれ伏している。中国の台頭が自然破壊と地球環境危機を促進していることも見落とせない。汚染物質の大量排出に止まらず、その資源独占への狂奔が自然破壊的投機を促進しているからだ。

危機が深まる中で「連帯」や「共生」の理念を代表すべき勢力から提示される施策は、せいぜい「セイフティネット」を張ることにすぎない。確かに心地よい表現ではあるが、所得格差の地球規模での拡大、絶対的貧困階層の増大に対応できる有効なネットなどある筈がない。ネットではこのモンスターを制御できる筈がない。もはや市場の内部に抵抗の主体を求めることは不可能に見える。システムを変えることが求められているのに、なにをどこから始めたらよいのかわからずに、門口で迷い続けている。

このままいけば、投機的資本主義が再興するだけでなく、自然破壊、人権抑圧、収奪強化の体制が拡大再生産されることは目に見えている。この流れを抗することなく放置してよいものだろうか。地球大的寄生性に対抗する新しい理念を模索しなければならない。模索の道すじはまだ見えてこない。どのような抵抗軸が可能なのか。いくつかの命題を示して議論の素材を提

供してみよう。

II 「連帯」の経済をめざして

「経済」とは何だろうか。貨幣的利得の最大化をめざして他を押しつけて競争することが「経済」だと理解する態度はとつづくに破綻している。「経済」とは貨幣表現される市場的関係の総体であるという通説、その外にあるものは未開の非文明的関係であり、先進国が実現した市場的関係に進むことが「進歩」であるとする主張ははたして正しいものだろうか、再検討しなければならない。たとえば GDP や貿易額という基準で測定すると、貨幣で表現される世界市場のほとんどは先進国と「新興国」によって占められる。世界人口の圧倒的部分を占めるのに、全世界 GDP のわずかを占めているにすぎない非先進世界は経済的にはまったく無意味な世界となる。せいぜいのところ、先進国型開発を受容する部分に限って、その開発に限って存在意義を認められているのすぎない。これでは世界を捉えきったとはいえないのではないか。

経済活動を円滑に維持することは人類の歴史と共に古い課題であった。たとえば古代王権の最重要政策は、貨幣制度と度量衡制度を統一することで交易や通商を発展させることであった。記述された経済学はアリストテレスの政治学、経済学、倫

理学の体系的記述に始まって、ヨーロッパの学の体系の中心にあった。それはアジア世界やイスラム世界の思想についても言えることであろう。世界宗教の登場によって経済活動を宗教倫理とどのように合致させるかは、支配者の重要な課題であった。市場こそが、市場だけが「経済」とする世俗的理解が普及したのはごく最近のことであり、人類の経済活動の長い歴史からみると、時間的に見てきわめて短い、限定的なものと言わざるを得ない。

人類の知的先達が解明しようとした「経済」の普遍的定義を問われれば、私は躊躇なく「共に豊かになる」仕組みであると答えたい。地球環境問題を考えてみよう。世界の資源のほとんどは先進国によって占有され消費されている。このままいけば、他の国々や将来世代には何も残されない。「共に豊かになる」

「将来世代にも豊かさを残す」という理念によって突き動かされる「市場経済」などあったためしがない。「持続可能な発展」はどのような時代でも前提されるべき規範的枠組みだったのではないか。現実を突きつけられて、ようやく「経済成長と環境問題の両立」と言い出したが、成長か環境かという選択は明らかに間違っている。これが「市場経済」とその担い手たちの理念なのだ。それは「共に豊かになる」という普遍的理念からはほど遠い。

地球上には実に多様な経済がある。人権が尊重されるべきものがあるなら、それらの経済の存在も同じように尊重されなければならない。これこそが地球大という視点で考えるときに前提

とされるべき枠組みである。優勝劣敗ではなく「共に豊かになる」原理を明らかにすることが求められているのではないか。経済学の父として畏敬されるA・スミスは、『諸国民の富』の刊行に先立って1759年に著した『道徳感情論』はその論述を「同感」の解明から始めている。

「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、あきらかにかれの本性のなかには、いくつかの原理があつて、それらは、かれに他のひとびとの運不運に関心をもたせ、かれらの幸福を、それを見るときという快樂のほかはなにも、かれはそれからひきださないのに、かれにとって必要なものとするのである。この種類に属するのは、哀れみまたは同情であつて、それはわれわれが他の人びとの悲惨を見たり、たいへんいきいきと心にえがかせられたりするとき、それにたいして感じる情動である。われわれがしばしば、他の人びとの悲しみから、悲しみをひきだすということは、それを証明するのになにも例をあげる必要がないほど、明白である。すなわち、この感情は、人間本性の他のすべての本源的情念と同様に、けっして有徳で人道的な人にかぎられているのではなく、ただそういう人びとは、おそらく、もつともするどい感受性をもって、それを感じるであろう。最大の悪人、社会の諸法のもつとも無情な侵犯者さえも、まったくそれをもたないことはない。」(A・スミス著、水田洋訳『道

徳感情論』(上), 岩波文庫, 2003年2月, 24-25ページ)

人間をどのように利己的なものと想定しようと, 人間には内在的に相手の状況に同感する感情があると, スミスは主張する。

「利己的」という規範が市場経済の主役である経済人の規範と理解されるのが通例だが, 「同感」こそが人間存在の根源にかかわる共通の経済規範であると理解したい。スミスにとって市場経済の研究課題は人間関係を律する社会規範の解明であった。彼が言う「利己主義」, あるいは『諸国民の富』で明らかにした市場経済原理は, 人間としての連帯を基盤にしたものだったのではないか。ところがスミスの原理は自由放任主義とされ, 利己心に経済を委ねれば, 「見えざる手」によって効率的, 合理的解決が図られると理解されてきた。利己心は類的共感を基盤にしている, 相手を打ち負かす競争で相手を哀れむなどと, 市場経済の担い手たちは考えだにできなかった。スミスの態度は捨て去られ, ひたすら市場経済の純化が追求されたのである。

「同感」も「連帯」も消えてしまった。

グローバル資本主義の規範と枠組みはもはや「共に豊かになる」, 共感するという類的連帯とは無縁のものになっている。それを復活させなければならない。「経済」の作り替え以外に道はない。

Ⅲ 「労働」と「市場」をとらえ直す

「連帯」の規範の復活のためには、労働についての従来の考え方も再検討しなければならない。

美しさ、古典的価値を尊重しよう、自然や景観を楽しもうという人間的本性、生物多様性を維持しあらゆる生物種との共存を模索しようという人間の態度は、貨幣的に表現される市場の原理には反映されていない。それらの人間的本性が市場に登場するのは、価格がつけられる場合か、費用便益分析に無理矢理押し込められる場合だけである。労働の成果ではないものが偽りの価格を付与されて市場に登場する。本来社会的には役立つものと判断されない労働も就業労働に編入され課税対象とされる。「市場経済」が取り込む労働のいびつさは明白である。この状態が恒常化すると、人間性そのものに歪みが生まれる。本来無償の善意の労働に対して対価が要求されるようになる。人間的連帯は確実に衰退する。

人間の本性に反する市場の拡大の惨禍は、地球環境危機に如実に示される。現代の危機を乗り切って新しい原理に基づく社会をめざすには、効率優先の市場の内部に環境危機を認識させる装置を作ることが必要だが、そのためには市場の外に人間的本性に対応した経済的関係を回復させることが不可欠である。それなしの市場の倫理的水準を高めることはできない。K・マルクスが喝破したように、「蓄積せよ、蓄積せよ」、これが

市場における至上命令なのだ。

市場に倫理性を反映させるためには、人間労働のあり方について再検討が必要だ。自身の筋力、知力を使って労働して人間は生きている。労働は人間活動の基本である。社会的に役立つ労働とは市場経済の内部で社会的分業を構成する労働であり、それが職業、あるいは就業労働である。就業労働は人間労働の多様な形態を浸食し、本来無償であり自発的に行われた労働を対価を要求するものに作り替え、その傾向が先進国社会を覆い尽くすかのように進んでいる。

就業なしには生きられない。生活時間のほとんどを就業労働についやす状態をみると、社会科学が就業労働にしか注目せず、就業労働の外にある多様な労働形態を度外視してきたのは当然であった。K・マルクスが『資本論』を著した時代はまさにそうであった。長時間労働は人間の持つ労働の多様な可能性を奪い去り、家事労働を非人間的なものにした。標準労働日を求める運動はまさしく人間性回復の運動だった。だからこそ I・イリイチは背後に追いやられた労働を「シャドウ・ワーク」という陰湿な表現でとらえたのである。今ではこの概念を積極的な社会的意義を持つものにとらえ直す試みが定着し始めている。就業労働の外にあるさまざまな経済活動、社会活動が経済社会を維持していくのに不可欠なものであることは誰もが認めている。その労働形態を「市民的労働」と定義してみよう。

伝統的な地域活動に加えて、今日ではさまざまな分野でボランティア活動が活発になり、社会ではなくてはならない活動で

あることが認知されている。自然災害時での重要な役割はよく知られている。非営利の労働は経済の分野で日増しにその比重をたかめている。さまざま分野で金銭的取引や交換による経済活動が展開されている。ガレッジセールやバザー，地域通貨などがそうだ。地球環境問題や食の安全にかかわって，効率性や利便性だけに頼らない経済活動が注目されている。市民的労働，すなわち市民の連帯感に基づいた労働による経済活動は，一見すると非効率的で無意味な行為にも見えるが，市場と経済を健全で持続可能なものにする要素を孕んでいる。市民的労働の比重が高い社会は健全で安定したものと言わなければならない。

「豊かさ」は，就業労働が人間のすべての労働可能性を喰らい尽くすことによってもたらされるものでは決してないのだ。

NPO への就労が就業人口に占める比重が高まっている。この就業は「市民的労働」と就業労働の接点のところに位置づけられる。つまり，就業労働であっても，必ずしも営利的活動に含まれない部分が大きくなっているということだ。NPO 労働の比重の高さも社会の「豊かさ」を計る重要な尺度であろう。

人間は生きてゆくためには多様な社会活動に関わる必要がある。それなのに，就業労働に取り込まれてボランティアやさまざまな地域活動をする時間的余裕が奪われてしまった。

「市民的労働」の時間を取り戻すこと，それが労働時間短縮の目標の一つである。獲得した時間を遊びだけに費やすというのでは，真の人間性回復にはつながらない。回復すべきは連帯と協同の労働なのだ。

家庭を基盤にした労働の役割も無視できない。この労働形態が価値の低い従属的なものでは決してない。食事や育児，家庭を基盤とした生産や交換等の生存維持的労働に限定されず，消費過程やリサイクルの末端はこの労働形態が担っている。この労働に支えられてリサイクルは可能になり，資源循環が完結する。現代を考える上で，家庭を基盤にした労働は消費活動をエコロジー的に見直す上で重要な意味を持っている。

人間労働の多様性に対応して人間の営む経済的關係も多様なものでなければならない。家族，家庭を基礎に展開される贈与，無償のサービスの相互の提供，その交換の地域的仕組みからなる地域的経済關係，安全性を重視した地域市場の発展，これらは本来，資本主義の発展と並んで人間社会に内在した経済關係であった。効率性の重視の生活様式が定着する中でそれらは貨幣表現された市場の中に取り込まれていった。家庭で食事を作るよりも外食を選び，家庭内サービスも外部から有償で供与されるようになった。安全性に問題があっても低価格を選ぶ傾向が定着した。このように伝統的な経済關係が市場に取り込まれると GDP はその分だけ確実に押し上げられるために，豊かになったと錯覚したのである。

無制約に市場経済に身を委ねることがはたして「豊かさ」なのか，あらためて問い直されている。あらゆる生活分野が市場経済の取り込まれたとき，恐慌や危機は人類を究極の貧困のどん底に突き落とす。市場経済の下ではさまざまな利害集團の連帯性は闘争と対立によって再配分で有利な地歩を確立しようと

するもので、「豊かさ」を安定的に確保するものではない。市場の外にある経済活動に示される諸関係こそが連帯性の基盤なのだ。以上の視点から見ると、GDP 基準で「豊かさ」を測る態度は不毛としか言いようがない。それぞれの国の個性的な豊かさを計る視点が求められる。

IV 経済の国民的特性を再構築する

グローバル資本主義の支配の拡大はそれぞれの民族や地域の文化的基礎を掘り崩し、深刻な対立や相克を生み出している。経済的にはそれぞれの国民経済が持つ特性をなくし、均質化、画一化が進んでいる。この過程は今に始まったことではない。アメリカ経済に似せた画一化が戦後その一極支配の下で急速に進んだ。画一化は生産様式や経営手法に止まらず、生活様式そのものにまで及んだ。このことがアメリカの商品と資本の世界制覇を可能にする基盤となった。グローバル資本主義の下でその過程はさらに極限にまで押し進められた。多国籍企業の支配の拡大を推進し投機的資金の寄生的資本蓄積を推進する条件を整備しただけでなく、リーマン・ショックにはじまる経済恐慌を急速に広く深く伝播する条件にもなった。

そういう中で、危機を契機に各国経済の国民的特性を強調し、その再生を求める主張も強まっている。とつくに忘れ去った日

本的経営への回帰の主張だけでなく、イスラム経営やイスラム金融に対する関心も示される。その主張はグローバル資本主義に抗するよりどころにも見えるが、ことはそれほど単純ではない。

かつて日本企業の成功が日本独自の経営手法にあるとされ、国内外の学者たちの間で「日本的経営」の特徴が論じられた時代があった。いわゆる「三種の神器」論議にはじまって日本的な集団主義の基礎がイエかムラかという論争に至るまで華々しく議論された。日本の地域市場や生存維持経済で重要な役割を果たしていた「イエ」も「ムラ」も高度成長の過程でほとんど消滅していたが、多くの経営者たちはそのような日本的素養のなかで育ち教育されていたし、その頃の宗教的・社会的倫理を持ち合わせている経営者は多数存在した。労働者も社会の内部から失われつつあった生き甲斐、やり甲斐を就業労働に見出し、企業への帰属意識を強めていた。経営者、労働者ともにまだ市場経済に破壊し尽くされていない経済関係の名残の理念やイデオロギーを持ち合わせていたのである。

日本的経営はすでに大企業の経営組織や手法としては滅んでしまった。昨今の経営者たちのモラルハザードを見聞するにつけ、日本的徳性などとつくに消え去っている。中国社会の深刻な道義的荒廃から社会主義が破壊し尽くした儒教思想の再興が開始されていると聞く。日本では儒教思想を徳目としたエリート教育は消滅した。今では日本的経営の再興はそれ自体としてはありえない。日本のリーダーたちの品性を見てみたらよい。

リッチとプア，勝ち組と負け組のコンセプトが当たり前のように論じられ，社会に内在すべき連帯性の理念などすっかり消え去っている。

地球環境問題や貧困問題の現状を見聞するにつけ，私は自分が育った時代の地域市場や家族関係に組み込まれていた宗教的倫理や連帯感を思い起こす。それらの倫理や連帯性の再興なしには地球的課題の解決はあり得ないのではないか。忘れられていた「もったいない」という言葉が外国から再導入されているが，その言葉を使う人びとはそれが当時の宗教習俗に裏付けられた自然への畏敬の念の表現であることなど知る筈もない。あまさず食したのは，貧しかったからではない。生物を殺して得た糧に対する感謝の表明であった。自然に対する感謝と畏敬の念の再生なしに地球的課題への取り組みは不可能だし，日本に住むものの貢献などあり得ない。

画一化に対して国民経済の個性をまもることは，グローバル資本主義に抗する重要な道である。個性が破壊され失われたのであればそれを再構築することが必要である。その上で地球を構成する多様な経済が学び合うこと，協同することが求められる。

V 類的能力の復活をめざして

グローバル資本主義への抵抗の主体を貨幣的に把握される市場経済の内だけに求めてはならない。長い道のりになるが、市場の外に措定されていた経済的関係と理念の意義を見直し、その復権に努力することが重要である。本来的に人間的な経済的能力、類的能力の意義を再発見し、それによって包み込まれた市場を実現しなければならない。

人間の経済活動には、生存維持に関わる経済活動が基礎にある。効率とは違った関係を中心にした経済活動である。資本主義はその関係を侵食して「市場経済」を拡大してきたが、それを浸食の行き着く先は、「弱肉強食」のイデオロギーと拝金主義の蔓延する社会でしかない。この社会が人間的である筈がない。現代の危機の中で求められているのは、市場の外にある関係と理念の再興であり、本来的な類的能力の復活なのだ。

「学び合い」と「連帯」の経済学をめざして

1

経済学は今、グローバリゼーションあるいはグローバル資本主義という奇怪なモンスターの出現にたじろぎ、それが作り出す危機を捉えきれずに、その権威は急速に低下するばかりである。経済社会全体の奇怪さ、社会全体に蔓延するモラルハザードを見聞するにつけ、経済学者と自称することに嫌悪感を覚え、もどかしさと焦燥感がにとらわれているのは、はたして私だけであろうか。

社会主義体制の崩壊によって資本主義的市場経済は地球規模に拡大し、人類が育んできたさまざまな経済システムと生活原理がグローバル資本主義の大波に巻き込まれている。その大波が人類全体に平等な豊かさと安定をもたらすものではないことは理解していても、それに対抗する理念と運動を見いだせずにいる。衝突と小競り合い程度のものは繰り返されてはいるものの、奔流となって時代をリードする主張は現れない。それどころか、グローバル資本主義の仕組みの解明の門口にさえ到達し

得ていないのではないか。

混迷は、大学の講壇を支配する主流経済学でもある市場原理主義的経済学に止まらず、経済学全般に共通している現象ではないだろうか。多くの経済学者は、世界経済の総体を俯瞰できる理論的枠組みを模索し、人類の未来への展望について真摯に論議をしなければならない歴史的転換点に直面しているのに、講壇上から細分化されたテーマを講じ、過去の議論に依拠した教科書づくりに満足している。少なくとも私にはそのように見える。

講壇経済学が作り出した分析の枠組みの限界が明らかになっているだけではない。貨幣表現された市場経済の地球大的な拡大が、それぞれの民族や地域の文化的基礎の相違との間に深刻な対立や相克を生み出している現実を座視することはできない。アラブ世界やサハラ以南アフリカの経済の現実、中国をはじめとするいわゆる BRICs⁽¹⁾ の登場の衝撃を観察するならば、そのことを理解することにさほどの時間を要しない。経済学は、講壇派であろうとマルクス派であろうと、あるいは社会民主主義派であろうと、地球的視野で全体像を見通せる視角を欠いていることは明らかだ。経済学は地球全体を説明する原理ではなくなっつりつつあるのだ⁽²⁾⁽ⁱ⁾。

それだけに止まらない。焦眉の人類学的課題である地球環境問題を考えてみよう。地球環境危機の最大の原因の一つが人間の工業的経済活動、市場化された経済活動にあることは明らかであり、温暖化ガスの急増が深刻な景気変動をもたらしているこ

とが共通の認識になっているのに、経済学はそれに対する有効な対応策さえ出せずにいる。続発する自然災害に直面して、近代世界が作り上げたシステムもハードウェアもあまりに硬直的で、リスクに柔軟に対応できないことが明らかになっているのに、経済学はこれも「外部不経済」としてしか理解しない。経済学は市場メカニズムをエコロジ的危機を認識できるものに作り替えていく緊急の課題に直面している。経済学は国民経済の枠を超えて、国益の枠を超えて、地球的視野で問題を提起できる基準の獲得を迫られている。

危機が深まる中で「連帯」や「共生」の理念と市場の整合性に疑念を抱く論者も増えてはいる。しかし、グローバル化した市場を「連帯」の視点から批判しようという論議はいつこうに深まらない。「セイフティネット」を張ればよいという。所得格差の地球規模での拡大、絶対的貧困階層の増大に有効に対応できる有効なネットなどあろう筈がない。システムを変えることこそが求められているのに、なにをどこから始めたらよいのかわからずに、門口で迷い続けている。

2

そもそも「経済」とは何だろうか。それが確定されなければ、経済学の課題も明らかにならない。これまで経済学者はこれを

自明のことと考えてきた。経済とは貨幣表現される市場的關係の総体であると、少なくとも私はこれまでそう考えてきた。貨幣表現される市場経済を自明のもとし、その外にあるものは未開の非文明的關係で。経済学の対象とはなり得らず、いわば経済人類学の対象と捉えられてきたのである。

現代世界を観察すると、GDP でも貿易額でもよい、とにかくそのような基準で測定すると、貨幣で表現される市場の 90 パーセントは先進国によって占められる。このことから、世界経済とは先進国と先進国間の關係だという通俗的理解が生まれる。世界人口の圧倒的部分を占めるのに、全世界 GDP わずかを占めているにすぎない非先進世界は経済学の対象とはなり得ないのである。せいぜいのところ、先進国型開発を受容する部分に限って、開発経済学の対象とされたにすぎなかった。「発展途上」というコンセプトは、このようなものとして確定されたのである。世界人口の圧倒的部分を占める人びとは経済学の対象から切り捨てられたのである。

3

経済活動を円滑に維持すること、それは人類の歴史と共に古い課題であった。古代王権の最重要政策は、貨幣制度と度量衡制度を統一し、そして交易路の整備によって交易や通商を発展

させること、統一した租税徴収制度を確立することであった。古代メソポタミア、バビロンの王ハンムラビ（在位、紀元前1792-1750）の命によって制定された法典、いわゆる「ハンムラビ法典」などはその好例である。そこでは所有権、契約その他の保護についての条文が重要な位置を占めている⁽³⁾。

記述された経済学は古代以来、アリストテレスの政治学、経済学、倫理学の体系的記述に始まって^{(4) (ii)}、ヨーロッパの学の体系の中心にあった。それはアジア世界やイスラム世界についても言えることであろう。世界宗教の登場によって経済活動を宗教倫理とどのように合致させるかは、支配者の重要な課題であった。さまざまなすり合わせの苦闘が展開されたのである。市場こそが経済とする「経済」の世俗的理解が普及したのはごく最近のことであり、人類の経済認識の長い歴史から見ると、時間的に見てきわめて短いもので、限定的なものと言わざるをえない。

しかもその世俗的認識さえもが、日々現実によって乗り越えられている。国際通貨投機や原油市場投機が常態化している。それを押しとどめる施策などもはやありはしないのである。

4

「経済」とは何か、人類の知的先達が解明しようとした「経

済」とは何かと問われれば、私は躊躇なく「共に豊かになる」仕組みであると答えたい。一握りの人びとが豊かになるのではなく、「共に」豊かになることが肝心なのだ。この場合、非効率を実質上是認するような社会主義、共産主義を主張しているのではない。他者との関係を見据えた豊かさである。地球環境問題を考えてみたらよい。世界の資源のほとんどは先進国によって占有され、消費されている。このままいけば、将来は他の国々には何も残されない。「持続可能な発展」はどのような場合でも前提されるべき規範的枠組みである。

地球上には実に多くの、多様な経済がある。人権が尊重されるべきものがあるなら、それらの経済の存在も同じように尊重されなければならないのではないか。非常に単純なことだが、地球大という視点で考えるときに前提とされるべき枠組みなのである。経済学はそのように豊かになるシステムを解明し、批判し、啓蒙することものでなければならない。地球大的に共通する経済原理、優勝劣敗ではなく「共に豊かになる」原理を明らかにすることが求められているのではないか。

経済学の父として畏敬されるA・スミスは『諸国民の富』の刊行に先立って1759年に著した『道徳感情論』で、その論述を「同感」(sympathy)の解明から始めている。その冒頭の記述は感動的である。そこには経済学の最も重要な理念的出発点が見られると私は考えるので、引用しておこう。

「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、

あきらかにかれの本性のなかには、いくつかの原理があつて、それらは、かれに他のひとびとの運不運に関心をもたせ、かれらの幸福を、それを見るという快樂のほかはなにも、かれはそれからひきださないのに、かれにとって必要なものとするのである。この種類に属するのは、哀れみまたは同情であつて、それはわれわれが他の人びとの悲惨を見たり、たいへんいきいきと心にえがかせられたりするとき、それにたいして感じる情動である。われわれがしばしば、他の人びとの悲しみから、悲しみをひきだすということは、それを証明するのになにも例をあげる必要がないほど、明白である。すなわち、この感情は、人間本性の他のすべての本源的情念と同様に、けつして有徳で人道的な人にかぎられているのではなく、ただそういう人びとは、おそらく、もつともするどい感受性をもつて、それを感じるであろう。最大の悪人、社会の諸法のもつとも無情な侵犯者さえも、まったくそれをもたないことはない。」⁽⁵⁾

人間をどのように利己的なものと想定しようと、有徳、不徳にかかわらず、人間には内在的に相手の状況に同感する感情があると、スミスは主張する。「利己的」という規範が市場経済の主役である経済人の規範と理解されるのが一般的であるが、私はむしろ「同感」こそ人間存在の根源にかかわる共通の経済規範と理解したいと思う。スミスにとって市場経済研究は人間関係を律する社会的規範の解明であつた。彼が言う個人の「利

己主義」は、あるいは『諸国民の富』で明らかにした市場経済の原理は、人間としての連帯性を基盤にしたものであったのではないか。スミスを論じることからはじめたのは、「共に豊かになる」という私の主張と共通の基盤に立っていると考えたからである。

スミスの原理は、自由放任主義とされ、個人の利己心に経済をゆだねれば、見えざる手によって効率的、合理的解決が図られると理解されてきた。利己心には類的共感と共存しているなど、相手を打ち負かす競争で相手を哀れむなど、経済学者は考えだにしなかった。その後の経済学はスミスの態度を「道德哲学」だとして体系外に捨て去り、ひたすら経済学の純化を目指したのである。経済学の文献からは、「同感」も「連帯」も消えてしまった。それらのコンセプトは、市場経済から疎外された集団のイデオロギーとして生き残ったにすぎなかった。

スミスのこの主張に依拠して見た場合、グローバリゼーションの時代に経済学に求められているものは何か。経済学は社会進歩を見通す歴史的予見性についての権威を取り戻す以前に、その枠組みがもはや「共に豊かになる」、共感するという類的連帯性と無縁のものになっていることを自覚しなければならない。

(1) ブラジル (Brasil), ロシア (Russia), インド (India), 中国 (China) の頭文字をとった造語。2003 年にアメリカのゴールドマン・サックス社が初めて使用した。この国家群の世界経済への登場の歴史的意義については別の機会に触れたい。

(2) 紀伊国屋書店の PR 誌『アイ・フィール (i feel)』2004 年第 30 号 (秋号) に「主流派経済学にカウンターパンチを」と題する, 中谷巖と岩井克人との対談を発見した。岩井の評価はさておき, 中谷はカウンターパンチの対象である主流派経済学の旗手の一人であると私は考えてきたが, その旗手が自らにカウンターパンチを加えるというのだから, 奇妙な話ではないか。彼によると, 西洋起源の経済学を西洋の一神教的理念と密接な関係がある。「古典派・新古典派経済学はその延長線上にある。だから・・・きわめて抽象的かつ形而上学的な観念の世界から生まれてきたということが出来る。そういうことは, われわれ日本人が, 経済学を学ぶ際に押さえておかなければならないポイントです」

(9 ページ)。多神教と稲作文化という文化的土壌に接ぎ木された学問であり, 違和感があるのだという。そして, 「実は私も, 日本に合わない理論を日本に持ってきて, あたかも伝道師のように説いて回るのは, もう止めようとするようになりました」と自己批判の弁を披瀝している (8 ページ)。この自己批判がどの程度のものか, 日本の文化的伝統に根ざした市場経済学とは一体どのような内容なのか, 彼の今後の議論を見守りたい。一言付け加えさせてもらえば, 現代西洋経済学を一神教や形而上学的観念と結びつける態度は承服できない。経済学を今のように純化させていった歴史には別の説明が必要である。

(3) 中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』古代オリエント資料集成 1, リトン, 2002 年 5 月。

(4) 経済や経済学の語源となったオイコノミヤは本来, 家庭経済を意味してい

た。そ文献的出発点はクセノボンにまでさかのぼる。あるいはそれ以前についても多くの断片が存在するのかもしれないが、まとまった著作としては、紀元前 369 年から 354 年頃に著された『オイノミコス』が最初と思われる。

(5) アダム・スミス著, 水田洋訳『道徳感情論』(上), 岩波文庫, 2003 年 2 月, 24-25 ページ。

【補注】

(i) 中谷巖の自己批判は次の形で刊行された。中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのかー「日本」再生への提言ー』集英社インターナショナル, 2008 年 12 月。表紙の帯には「懺悔の書」とあり、本の中では「転向」とある。何に転向したのか。江戸時代, 明治初期にあったとする日本的平等と「安心・安全」への回帰をもとめるのだという。その日本歴史の認識は軽薄にすぎるものだ。かつて日本的なものを日本の経済や経営の優越性の根拠にした輩が排出した時代があった。彼らはその議論をいとも簡単に投げ捨てて新自由主義の軍門に下った。いままた昔に戻ろうというのだ。日本国内で上から下まで日本的特性を投げ捨ててしまい, 忘却の彼方に押しやってしまった現状から見て, はたして再生は可能だろうか。可能と言われるのなら, 自身の懺悔を頑張って伝道してもらおうではないか。本書の最後で次のようにまとめている。グローバル資本主義という「モンスター」を誕生させたのは, 「欲望を抑えることができなかった, 他ならぬ我々自身である」と。「欲望の抑制」以外にこのモンスターを押さえ込むことはできないというのだ。読者であるあなたの行動にも責任があるというのだ。これぞまさしく伝道者ではないか。

(ii) 最近, クセノボンの『オイノミコス』の 1794 年にハンプルクで出版さ

れたドイツ語訳の復刻が刊行された。Xenophon, *Oikonomikos* oder Xenophon, *Vom Haus-Wesen*. Faksimilie der 1734 in Hamburg erschienenen deutsch-griechischen Ausgabe, in : *Klassiker der Nationalökonomie*, Verlag Wirtschaft und Finanzen. クセノポン, および同時代の文書断片のギリシャ語本文とドイツ語訳を対照させた次の書物を発見した。*Oikonomika. Quellen zur Wirtschaftstheorie der griechischen Antike*. Eingeleitet, herausgegeben und übersetzt von G.Audring und K.Brodersen, Text zur Forschung, Band 92, Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2008.

ヨーロッパ思想の末端に繋がりながら学問してきたのに, 私には古典研究の基本的素養がまったくといってよいほどない。ギリシャ哲学の専門家たち, また中世キリスト教史の研究者たちは, アリストテレスもトマス・アクィナス, M・ルターも経済学にとって不可欠の文献だと言ったらさぞかし驚くことであろうが, 彼らの研究の広がりか私のような無学のものには必要なのだ。ところが, 世の哲学者たちの仕事ぶりを見ていると現代の理解に貢献したいという視点に欠ける人が多い。彼らの仕事はまったく役に立たないのである。

最近次のような書物を発見した。前述のクセノポンの復刻版が取り入れられた経済学古典復刻シリーズの編集方針に対応しており, クセノポンの記述から始められている。Bertram Schefold, *Beiträge zur ökonomischen Dogmengeschichte*, ausgewählt und herausgegeben von V. Caspari, Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2008.

櫻井秀子著『イスラーム金融』を手にして考えたこと
ーイスラーム研究者との協同を模索してー

1

『フォーリン・アフェアーズ』誌 1993 年夏号に発表されたサミュエル・ハンチントン (Samuel P. Huntington) の論文「文明の衝突」("The Clash of Civilizations?")に接したときの衝撃はいまだに忘れることはできない⁽¹⁾。彼の警告に言うイスラーム世界との断層線上での戦争は、すでに始まっていた。

ベルリンの壁崩壊後にドミノ倒しのように急速に進んだ社会主義体制解の連鎖の衝撃によって新しい世界像，世界認識の確立を迫られていた私にとっては，この問題提起は，いささか粗い分析とはいえ，新しい世界像を示そうとする迫りに満ちていた。私も含めて社会学者たちは，資本主義と社会主義の対立こそが近現代史のライトモチーフであり，イデオロギーの対立こそが分析の対象であった。この対立は基本的に異質のもので

はなかった。社会主義は資本主義の中に生まれ、その継承者として理解されたいからである。ハンチントンの問題提起は近代の脆弱さとその基盤の意義を再確認させてくれたと思う。露呈されつつある基盤について、私を含めて多くの人ほとんど知識がなかった。植民地を研究する人以外はイスラームなど学ぶ必要を感じたことはなかったのである。

激変の中で社会学者が選択した道は、自信喪失してイデオロギー的探求を放棄するか、アメリカ一極支配に、あるいはその経済学に身を委ねることであった。社会主義の解体で転がり込んだ資本主義の勝利、アメリカ一極の支配の時代は決してイデオロギー終焉の時代ではなかった。アメリカ発のイデオロギーを行きわたらせようという時代であった。それに無批判に身を委ねた結果がいま体験しつつある地球的危機である。近代化イデオロギーを基礎にした経済学は瀕死の状態に陥っている。死んだといってもよいかもしれない。ヨーロッパに発し、アメリカを経て地球上に広まり、グローバル資本主義という怪物を生み出した近代化の行き着く先はとっくに見えている。資本主義は人類が直面している地球的課題を解決する展望は示せないどころか、むしろそれを極限にまで押し進めてしまった。アメリカ証券市場の崩落にはじまった資本主義の経済的危機は底が見えないくらいに深刻である。地球環境危機をはじめとする地球的問題群の解決も大国国益の衝突ばかりが目立ち、妥協では真の解決は不可能であろう。地球的危機はそれ自体の深刻さに示されているだけではない。この危機に対し反省の声など聞こ

えてこないことこそが問題なのだ。地球を支配しているのに、地球全体を救う責任など自覚していないのだ。金融システムを救うともっともらしい議論をしながらグローバル資本主義の中枢を救済することを平気でやらかし、経済的に力のない国々や市民を犠牲にするのである。

一極支配イデオロギーはここに極まったというべきであろう。多文明世界でのヨーロッパ的、アメリカ的なイデオロギーの埋没の危機を自覚して共存を模索したハンチントンの問題提起と警告は無視され、悪の枢軸と闘う十字軍を標榜する大統領の登場によって対立は一層拡大した。この時代に開発とアメリカ的民主化を地球大的に広めることを何の反省もなく主張する輩をなんと評価すべきであろう。

2

地球大の人類学的課題の解決を目指すには、ヨーロッパ的、アメリカ的世界のイデオロギーを相対化した新しい枠組が必要だ。儒教的世界はもはや世界史的影響力を持ち得ない。現代中国に儒教的関係を発見することは不可能であり、おそらく文化大革命はその残滓をすべて取り払ってしまったのだろう。そのことによって異様な資本主義が発展する素地が形成されていた。イスラームやヒンドゥーの世界がこの異様なまでの一極支

配に抵抗する主体を孕んでいるかもしれない。そのことの意義をを考え始めてから十数年経過したが、残念ながら私はその考察の門口にも到達できていないでいる。しかも、ヨーロッパ近代の歴史発展の帰結である資本主義・社会主義・第三世界という三分化論が崩壊した後でも、先進国、発展途上国、新興国等という「先進」を基準にした論議が当然のように進められている。後者の基準の方がもっと悪質だということなのである。

地球を構成する多様な経済認識の間で学び合うこと、協同することが求められている。そうするためには共通の土台が必要だ。ところが、経済、あるいは市場経済という場合、当然のように資本主義的市場経済が支配的な状態と理解してしまう。現実の経済的な営みを見ると、それは地球全体を説明しつくす原理とはいえないのである。価格や利益を競って競争する市場が支配的な国と地域は限定される。人間の経済活動は、生存維持に関わる直接的な生産と配分の経済活動が基礎にある。さらにいえば、効率とはほど遠い関係性を中心にした市場を含んでいる。それは生存維持的で本源的な市場と違ってよいかもしれない。資本主義はその市場から出発しながら、その市場を侵食して「市場経済」を拡大していったのである。しかし、人間はそのような生存維持的で根源的な経済関係なしには生きられない。経済とは、資本主義的市場経済による生存維持経済としての浸食、あるいは前者の后者に対する寄生の総体である。地球上のさまざまな地域の経済の多様性を比較し、学び合うためにはこの視角の確認が必要だと思う。

前おきが長くなってしまったが、これが櫻井秀子氏の『スラム金融—贈与と交換、その共存のシステムを解く—』（新評論、2008年9月）を手にした時に私がなんとなく考えていたことのすべてである。本書に眼を通して見て、この仕事は某有力経済紙の無署名書評が言うような「実務書」では決してないことはすぐに理解できる⁽²⁾。そのように使われることも意図されて執筆されている部分もあり、本書のメインタイトルでもあるイスラム金融の取引形態を詳述して、関心ある読者に応えようという意図もあることは確かである。

しかし本書の本当の目的はそこにはないと思う。第1に、うまく書き込まれているかどうかはともかく、イスラム圏における「市場」と「経営」の特徴を明らかにし、「倫理と不可分の経営」たるイスラム経営を効率優先の成長志向の資本主義に対する対抗軸として位置づけることをめざしている。第2に、グローバル資本主義批判の提案を含んでいる。第3に、その分析を通して日本的経営のあるべき姿にも議論を展開している。

その着眼点と構想は、イスラム地域研究の枠を大きく超えて、現代資本主義と経営の批判とその批判を踏まえた将来像の構築をめざしているように思われる。その点で、私のようなもっぱらヨーロッパ資本主義研究から出発して、その視点に限界

を感じ、その限界を突破しようともがいている者と共通のコンセプトがありそうな気がする。これらの着眼点が他のイスラーム研究者と共有されているのかどうかは知らないが、これを私は高く評価したい。これまで多くのイスラームや中東地域が刊行されているが、まだイスラームの視点から地球全体の認識に接近しようとする仕事はまだ少ないのではないだろうか。

著者の着眼点を正確に読み解き批評することは、イスラームに素人の私には困難な仕事である。理解以前の素朴な疑問が解決されずに残ったままなのだ。そもそも「イスラーム圏」とは何か。そこで展開されている「イスラーム的経営」とは歴史的、具体的にどのようなものが思い浮かべられて展開されるカテゴリーなのか。ヨーロッパやアメリカの研究の場合には、研究成果の集積と体験が可能なことによっておおかたのカテゴリーはその具体的事例を思い浮かべて理解が可能である。ところがイスラーム世界の実態となると様子が変わった来る。メディアに登場する映像は役に立たない。イスラーム圏は「アラビアンナイト」の世界といわんばかりの描写が多いのだ。

アラブ首長国連邦の開発のものすごさ（それ以外に適当な表現をみいだせないほどの）を映像で見ている限り、資本主義的発展がヨーロッパ、アメリカ、日本を超えて「イスラーム圏」にも拡大しているとしか言いようがない。トルコやエジプトの現実、中国系市民の旺盛な起業家精神をたくみに取り込んでいるとはいえマレーシア、インドネシアの経済の動向はどのように評価したらよいのだろうか。特異なイスラーム的資本主義が

生成しているとした方が本来イスラーム社会がもつ原理との相克が理解できるのではないか。

イギリスに典型的に見られた発展を資本主義とするなら、その後展開した資本主義はみな特異なものである。自生的に、内発的に発展した資本主義などあり得ない。日本資本主義が軍艦外交によって強制されてその発展を速め、第二次大戦の敗戦によって改革を余儀なくされたことかも明らかのように、既存の資本主義との接触に刺激されてさまざまな形態で始まったのだ。要は他人の労働を搾取するという構造と、資本に転化できる貨幣財産が集積されていることがそのための基本的条件であった。「イスラーム圏」でもその条件が十分に成熟しているし、アメリカその他の西側諸国の軍事的、政治的干渉はその過程をさらに押し広げているのではないか。イスラーム的経営の定義がこのような現実をふまえて豊富化されることを望む。

4

最終章第5章「中道をめざす社会と経営」は、私には一番惹き付けられる部分である。著者は日本社会の仏教的基盤に着目して、イスラーム社会の倫理的共通点を指摘し、日本的経営に対する提言をおこなう。倫理と経営のバランスをとる「中道の経営」「相利共生の経営」は仏教的理念を旋回軸として実現で

きる。それこそが今後の経営のあるべき姿を与えてくれるとする。

資本主義的市場関係を一定の宗教的理念を踏まえて批判する視点はすでにかなり知られているが⁽³⁾、イスラーム学者の側からの積極的提言は希有のことではないか。このような視点はこれから、地球環境危機、しかも温暖化に限定されず、資源、人口、貧困問題、自然破壊等の地球的課題の解決をめぐって、また進行しつつある世界恐慌からの脱出の道をめぐってさかんに議論されるにちがいない。

しかし、日本の状況については疑問を感じている。企業経営のどこをひねくり回しても、仏教的理念など感じられないし、「中道」への志向などみじんもない。かつて日本企業の成功が日本独自の経営手法にあるのではないかとされ、国内外の学者たちの中で「日本的経営」の特徴が論じられた時代があった。30年ほど前の頃であったろうか。その頃に収集した書籍もノートもすでに失われたので、正確なことは論じられないのだが、いわゆる「三種の神器」論議にはじまって、日本的な集団主義の基礎がイエかムラかに至るまで華々しく議論された。日本の地域市場や生存維持経済に重要な役割を果たしていたイエもムラも高度成長の過程でほとんど消滅していたが、多くの経営者たちはそのような日本的素養のなかで育ち、その頃の宗教的・社会的倫理を持ち合わせている経営者が多数存在した。労働者もTQC運動や改善運動に主体的に積極的に参加し、社会の内部から失われつつあった生き甲斐、やり甲斐を見出し、連帯感を

感じ、企業への帰属意識を強めていた。まだ社会に名残があったし、生存維持経済、さまざまな関係性を含む市場はなお維持されていた。

日本的経営はすでに大企業の経営組織や手法としては滅んでしまったとあってよいであろう。日本的経営の再興はそれ自体としてはありえないのではないか。日本の経営者たちの品性を見てみたらよい。かつてあった関係性をふまえた倫理など持ち合わせてなどいない。リッチとプア、勝ち組と負け組のコンセプトが論じられ、社会に内在すべき連帯性か関係性などとつくりに消え去ってしまっている。

地球環境問題や貧困問題の現状を見聞するにつけ、私は自分が育った時代の地域市場や家族関係に組み込まれていた宗教的倫理や連帯感を重要な体験として思い起こす。それらの倫理や地域における連帯性のルネッサンスなしに地球的課題の解決はあり得ないのではないか。当時の宗教的習俗への回帰を主張するわけではない。忘れていた「もったいない」という言葉が外国から再導入されているが、その言葉を使う人びとはそれが当時の宗教習俗に裏付けられた自然への畏敬の念の表現であることなどまったく知らない。あまさず食べたのは、貧しかったからではない。生物を殺して得た糧に対する感謝でもあった。その感謝と畏敬の念の再生なしに地球的課題への取り組みは不可能だし、日本に住むものの貢献などあり得ない。私は唯物論者で宗教心薄い人間だが、それでもその点にこだわり続けている。

このような私の議論でもイスラーム研究者の課題と共通点があり、協同が可能だろうか。

- (1) この論稿は後に次の書物に仕上げられ、刊行された。Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York 1996 (邦訳：鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998年6月)。
- (2) 『日本経済新聞』2008年10月19日。
- (3) 巨大化する経済を批判し人間本位の経済の構築を提案し、仏教経済学の可能性を提唱していまなお影響を広げている E・F・シューマツハーもその1人である。E.F.Schumacher, *Small is beautiful. Economics as if People Mattered*, Introduction by Paul Hawken, Point Roberts 1999, originally published in 1973 (邦訳：小島慶三他訳『スモール・イズ・ビューティフルー人間中心の経済学ー』講談社学術文庫、1986年4月)。さらに、イギリスでシューマツハー・カレッジを主宰するジャイナ教徒サティシュ・クマールの関係性の哲学も注目され始めている。Satish Kumar, *You Are therefore I Am. A Declaration of Dependence*, Foxhole 202 (邦訳：尾関修他訳『君あり、故に我ありー依存の宣言ー』講談社学術文庫、2005年4月)。